

B-53) 慢性硬膜下血腫の外科治療

—術中リンゲル液髄腔内注入法—

上野 一義・高橋 明弘 (国立療養所北海道)
 板本 孝治・遠山 義浩 (第一病院脳神経外科)
 佐久間司郎・加藤 正仁

慢性硬膜下血腫は手術により劇的な症状の改善が見られる数少ない疾患の一つであるが、その術式には開頭による血腫及び被膜除去、穿頭による血腫洗浄、Twist drillによる血腫ドレナージ等が報告されている。どの術式によっても大多数は良好な手術成績が得られるが、少数例において血腫の再貯留や Tention Peumocephalus などの合併症が見られる。

我々は穿通による血腫洗浄の術中に腰椎穿刺よりリンゲル液の注入を、脳の再膨隆を助け洗浄を完全とし、空気の流入を避けるために行っているが良好な手術成績を得ているので報告する。

症例は1988以来の59例である。術後症状は速やかに消失あるいは軽快したが、14例に痴呆(軽度11例、中程度3例)が残った。CT上血腫の消退は速やかであった。注入したリンゲル液の量は20から290ml、平均130mlであった。

第43回新潟膠原病研究会

日時 昭和63年12月1日(木)
 会場 新潟大学医学部有壬記念館
 (2階大会議室)

一般演題

1) 膠原病性間質性肺炎の BALF 細胞所見

原口通比古・本間 智子
 桶谷 典弘・嶋津 芳典 (新学大学)
 中野 正明・永井 明彦 (第二内科)
 来生 哲・荒川 正昭

膠原病は間質性肺炎の基礎疾患として重要であり、頻度の差はあるが各主要疾患で広く認められる。従来の胸部X線所見、肺生検所見等の肺のみの所見からは、各膠原病性間質性肺炎(IP-CVD)間、および特発性間質性肺炎(IIP)との鑑別は困難とされている。今回IP-CVD 35例、IIP 21例を対象に気管支肺泡洗浄液(BALF)細胞所見、特に一部の症例において表面積質から見た肺内単核細胞の活性化所見について検討し、その意義について若干の考察を試みた。IP-CVDの内ではPSSは、BALF所見上炎症所見に乏しかったが、その他のIP-CVDでは、IIPに比しリンパ球比率が高く、好中球比率が低い傾向を認めた。BALFリンパ球サブセットすなわちOKT4/8比の鑑別上の意義については明確な結論は得られなかった。HLA-DR抗原の発現強度を指標とした肺内単核細胞すなわちTリンパ球および肺泡マクロファージの活性化所見についてみると、IP-CVDにおいては両者間に相関が認められ、またBALF所見上の炎症所見とも関連が見られた。一方、IIPでは両者間に相関は認められず、IP-CVDとは異なる所見であった。以上より、治療に対する反応性の差ともあわせ、IP-CVDとIIP、さらにIP-CVD間でも、その成立過程におけるリンパ球および肺泡マクロファージを介した免疫学的機序の差が存在する可能性が示唆された。

追加発言

新発売の細胞自動解析装置の機能について

木村美奈子 (新潟大学輸血部)
 丸山 聡一・青木 定夫 (同 第一内科)

1988年9月から試用しているフローサイトメーター(FCM);サイトロン(オーソ社)とFACS can(BD社)を紹介した。

改良点は、①コンパクトな卓上型 ②高性能小型空冷